

誄諧七部集

上



誄諧七部集
上

明治八乙亥初春



富士巻



昌経誌

此書七部内書添全備不

Handwritten vertical text on the left side of the right page.

Main handwritten text on the left page, written vertically from right to left.

の篇成さくたれまをさるるよりよとくをうんずハ
たより此園をよりあきくもあさめれと
ひいしういなるのさう原りあさめれハ
巧士めたてもやゆつんむう一 蕭灼を五経成てく
のかりらよまういあさくし若く納めいま子固七部
を祓つこのあともききこくはねよ懐きせんとし
七部ハ漢書七経ともいれしう唐大和のさうふ
くともいともさ心同くうつ一をやく橋本よ
ちりそめく凡月のさえをたけけと云

著者水母散人吳竹地よりの里に

志るは

去平月也くもいれ
我が是れ水母散人の
水母散人吳竹地よりの里に
著るは

水母散人吳竹地よりの里に
著るは

水母散人吳竹地よりの里に
著るは

春乃日

曙見むと人しく此戸扣あひく勢田此うのり由ま
渡し舟をうくあり由く既五松のうの中ん
いつていとのとらあり重五う枝打を片行播程
ちつきまたちよりんさ此ま色をたぬひ出傷

二月十八日

荷令

春め色や人さ萌く此伊勢氣り
楊ちる申思あひく通れ
山うすむ月一時く鋭ま
鑑あふ此火よあふ
志不風よよく少ハ流あま
重五
雨桐
李風
昌圭

くそりよ沖の岩悪く見せぬ
次大寺よ汗乃惟子脱うつむ
をのくあまふ角をいそく
文王のをや一は字を土つア
雨の氣此角乃あまき草
肌まこ一度ハ骨を和どく
傾城乳あうくや農明
旁拂み鏡よ人の乳移り
己やくとのこ所裏かく里
香居下りよまぬ真此砂のく
花は花男乃留夢あへるまろ
柳よま法そあうと鞠あまや
瓶を
重五
李風
雨桐
昌圭
雨相
重五
昌圭
李凡
香小

口をくへき清多あがき
松風よなをれ名祇の酒の碎
責残したる虫をみ川月
望白き太秦糸をさし
常ある垣よよい子えくをく
表所ゆつりし二人髪割し
曉のうら車ゆく長
鱈有るを大津の濱に入らり
何やよ少むを玉乃
旅衣あきまをを蚊やうりて
秋をたたり一カ日乃を
里人よ蓋を施し秋の雨

越人
羽野
水
城
目
野
越
羽
野
城

月乃を浪よまを石をく橋
赤らひきる木根よ花の船を
祝をやめま雲の湯乃乃山
のとれや築紫の袂伊勢の草
内侍のえよふ代々の眉の圖
物思ふ軍比牛を片根り
名を後栗とちかや上け
大年八念佛とあやる恵比壽たか
そのとま言あよよし
終夕のあまのたえよ物杞く
あやうりル白をやまきまの務
一夜うは病はるるを音あれや

羽野

こゝ魂まほるきささしきれ月
陽されも残りし夫婦いそ
まふ雨袖より雨奇しくく
由を待つく花見る里は生けり
力の節をほきし中此子
漣や三井の末寺に流りし
言びくのみよ雪の山
見はけり九日の月をきき
君のはと名よ氷あこりけり

三月十六日且葉う田家^{トナリ}追
蛙此^{トナリ}少く中^{トナリ}き^{トナリ}保^{トナリ}岩^{トナリ}爪

野水

額^シもあつて春雨のむり
蕨^{ワケ}薫る岩木の泉^{イハ}きき宿^ヤりて
あししくくをんさるるの子
まろく地るは川の舟の月影よ
芦花穂^{アサ}を摺る傘^カの端^ハ
磯^{イソ}岸^キは花^ハ鶴^{ツル}息^イの信^シの集^ツり
岩の弓^{イハ}より花^ハ見^ミるささし
雨の目^{アメ}も龍^{リウ}焼^{キョウ}やむ煙^{エン}をり
ひささきもも旅^{リョ}の^ト一^ト
君^{キミ}もも坊^{ボウ}主^{シュ}ハ^ハ信^シを^ヲ流^ルり
解^トくや^ハお^りむ^を枝^エむ^すま^すり
と^と育^ハま^たり^とく^くや^め

日十九日花分室より

浪語ハ信ナラカ
紹鷗カ又連弁
又紹鷗ハ大瓢ヲ
覺ヤト云

暖戸の菊よハ花一き白萩そ
秋の和名スううふ
和戸の夢よらうう火を折知
別の月ふらふあや
花を花田のまよりハ唐輪
去りたのまもむつり
永ま見やを解を吹白
美の子ま生るよ月雨の舟
浪語ハ瓢ハありく米をそく
連歌のまよりあさるい
流毒ハ采押お
世

鏡ノカキ葉巻邊
福多ハ原カ

岩苔^{コケ}よりの^{カゲ}の鏡よろく
むきなりよ衣きくありく世の中よ
花二枚もひろきハ永ハ
物ことろあをれまき
暮れを運まきぬ
風のまき秋の月舟ハ網入
を羽の漆のおより
あま
一初解の名もあ
春の着水汲ハ登起
錦をくひつしそよ君う代
山ハ花ハ残ハ花よ日

曇りてしん 雲雀 鳴り

追加

三月十九日舟泉亭

紙人

山少きのあふき岨のくづれ

蝶糸のこもろく 岩を

きさくさや 錦酒すき 雲海

行幸のたむら 波よ 土 器

網目をこぼす 川 瀬流のいふあ

月をきこその門をやくあ丹

春

昌隆の志とハ 岩 津 氏 の 志

元日の木のる地 競馬 足巾

初春の子星牛の初き日

川さのさき海ハ 福あり 麦の原

門ハ 木公 芍薬園の 玉を

鯉のき水不の 園く 梅白

舟く の少松よ 聖の 残り

曙の人 狂牡丹 花 びん

櫻てした 元日 里の 睡り

星をり 可すあ 先の 四方の

舟日ニ 分析の 初く 包ひ

先鳴く 社の 糸ひ 雲

芥槁とく 二付く ぼあき 瓢

れうれいする人の許へ行く

見返れそ白雲いやー夕暮
古池や虹とひこむ水の音と
傘池の晴る胡蝶のやどりか
山や花挿梅のほろやー
花埋れくまふく死んか

春遊吟

足跡は梅を曲ふ菴二二川
掃寺うぐれ虫土のハさくさく
板まく梅の廻き二涙の那

饒別

菴のむをくさりぬひく別式

山畑乃茶つことろまは夕日
蚊ひとりも梅はねね板をま

夏

ふとまはるその山を死尾はる
ふとまはるその山を死尾はる
ふとまはるその山を死尾はる
ふとまはるその山を死尾はる
ふとまはるその山を死尾はる
ふとまはるその山を死尾はる
ふとまはるその山を死尾はる
ふとまはるその山を死尾はる
ふとまはるその山を死尾はる
ふとまはるその山を死尾はる

夏

逢坂のぬはら思ふ物よ月

多路くおれりりり反の月

老朋曰知是之足常足

夕陽の影は新炊玉きせ粟粒う草
帚木の微向こりれして鳴鶴うそ
けくき木ハあらむ牛よ鹿よう
萱草ハ茂る日易き死のくも
蓮池の浮きこぼるる浮きあか
晴の反陰糸丸のこききう邪
反川の言くも宿るる木も詠か
辟喻品の三界を安堵如火宅
といふんを

六月の折ぬくひ居る是の邪

秋

岩戸の畑をうけまをえきりり

笑家の玉糸

魂をけけけけ一席入るはけ

をりり一人を休むる月思ふ

山寺よおほくるとの丸おか

尾ふく家も西の中秋の月

八葉をかけける扇風

地繪を見く

具はとるはのそお一月見

待来

こねなを唐黍をー見むる

第百四巻

秋の夕陽を眺むに
秋の夕陽を眺むに
秋の夕陽を眺むに

るいあね牛ハ夕日の村をくぬ

芭蕉を存を宿し侍り

そまをきし旅麻人の影をませ中

そまの原其舞の子の影をう那

そまをきくありゆるまの朝のうさ

芭蕉を存を遠りくく侍

けんの氷をきく名残う那

けんの影けんをきくまのま

芭蕉

歌人

院主よりうりある節を

そまをきく

あまのまをきく一ツをまをり

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the characters '院主' and 'あまのま'.

冬乃日

望ハ比羅の海は本ころハ紙衣ハ着りハの嵐ハ
を免たり佳佳くしたるに以人承まハ所を此ニ是ハ昔
狂舟地也士ハ國ハと云くハ城ハ小園ハを以出まハ侍ハ

狂舟師上
庸國也後
狂舟師上

狂舟

一ノカノト地才ハ休まハ似まハ
たそやとハハ山草也
有明水主ハ海をつとハ
うハの海を布ハあハ
解ハはそハ地色ハ
日乃ちリクハ種ハ米ハ
ワハ中ハ海にヤハ

芭蕉

髪をゆれま成まハ少のありと

芭蕉

いつハりのつとと乳をまありま
きえぬるとハうすこととたかく

芭蕉

あるハハハハたえハハ虚ハ家
田年ハハハハハハハハハハハ

吾ハハハハハハハハハハハハハハハ
たそハハハハハハハハハハハハハハハ

とありハハハハハハハハハハハハハハハ
ニの尼ハハハハハハハハハハハハハハハ

際ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
のりハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

芭蕉

皇威を以て此國。

あまの皇子 謚す

比山 耶公

吾等と云ふ

吾等

言恨の矢更に有る声
かた人の 花名の名を汁水

言物奴に空に有る小御前
名を以て言ふ唐土

去りしは陣に在る人昔何
鳥城の國に在る

日赤の赤白の垢に在る
中又不権を在るに足踏打

此は言物奴の女に在る
無一鞭の重城の赤

語 言物奴の赤城の赤
去りしは陣に在る人昔何

去りしは陣に在る人昔何
去りしは陣に在る人昔何

去りしは陣に在る人昔何
去りしは陣に在る人昔何

去りしは陣に在る人昔何
去りしは陣に在る人昔何

去りしは陣に在る人昔何
去りしは陣に在る人昔何

去りしは陣に在る人昔何
去りしは陣に在る人昔何

去りしは陣に在る人昔何
去りしは陣に在る人昔何

翁

芭蕉

芭蕉

禁米

翁

勢

〇貞徳の御免許
 柳を以てありし
 〇夏河津巻田螺
 芦管屋様
 あい

麻呂の母袖より蜀鼓をとりて
 梅の花をとりて貞徳の
 雨に花を沙香の田螺本りて
 貞徳の交枝のみまに
 床御許にて花を
 縁の根のこり
 口おしと痛をちまき地
 明日きこく
 小三石の盃とて歩ひとりて
 月を近く牡丹の
 縄あを花かりハヤ
 赤川
 箱

初を此の世とて梅の
 うかぬいと下の喜を
 梅をこに録ある
 うくひの起る
 三線
 及す
 移さ
 奉加め
 ひとりの傘の下
 道地
 ちり
 箱

臨海ノ毎トシニ
タリキヤク

月もそそけ唐輪の巻の巻拓く
巻せぬまゝあゝ臨濟をよす川
秋蟬のうらうら多まきくま川の子ハ
羞の宿つてよそ下ろりちり
秋より視をひくき山にけけに
死とりハ典侍の肩う月侍し
三ヶ地花艶晴尼あふの巻し
しとこのもいさむ越乃猥活并

つえ攻ひく事僅十歩

杜玉

ほくさく子く月とくあは露月か
こあり好き力水の心ありま

口入とけい労
苦勞イキトホキ

齒牙乃糸を二初狩人の矢は履て
心の心門をたしあまのをも
馬糞橙あふきに風の打つす
茶は湯着おしむ死への浦公英
らうきけは物よむ娘うつまて
燈籠電あふくはまをさけり
つる秋のす悔ふ力を撰ぐれ夢
蓄夢さくまき一滋賀樂の伝
朝月夜双とくち地旅麻
花買みちまほとくおたまく
それよはのあきとく雛を化り
命婦の君より茶あんとく

翁

翁

おつはちて津浪の水よつたれは
 佛喰たる魚解す、そのり
 懸ゆるたれんは帝と作れん
 女欣望 志 島 六反
 りきーけ、嗜るを雀ちり
 まま池を他移やううりや
 おうさきや矢継の橋のあきか
 庄屋の妻をよみくさうぬ
 控し子に早薊長いのひつ
 晦目をまじりく刀夢る年
 夢の狂黒の國のまゑつり
 襟すりき旗の片袖ととく

あふくと橋杖指し香由さ
 芥子のひとく、名をそんば禪
 二月の糸、暗く滝の影
 殊濁るはなを琴、くさる者
 意するもとゆ、くさをを
 弊しき念、佛教を尊、つ
 こげくし、くし、た記、
 ねまひ、ふりも、度家、地帯、引
 赤んね花、たすの、花の、ま、入
 下の、ま、の、目、は、ま、お、れ、
 切し波、ぼろ、あ、く、欠、鏡、家、を、
 ち、り、この、と

炭賣の葉のうつしを思ふ
 ひとの花鳥を瑞鷹 宇
 花蕪馬寄の葉まはちり
 驚ふ花まは月うすうあり
 うまのゆゑの秋の日籠も海を言
 秋織るうす城二市う振地れ
 翠茂川や胡麻千代糸り微塵
 ひたふらの花ちり川うれ
 花をさす布抱寄まわらぬ
 うまををさすうす御る三平
 拾はれてう雨うう花を言
 火をうぬ火燧あき人を思ふ

翁

翁

門守の翁は紙子うすくはる
 血刀うす月月の時きり
 芳方下りく平歸の港七ツま
 舟のうす川納豆さくはる
 死す巨槌の鼓ともしをけ
 傍えのしえん歌を言 春
 白燕帰るぬ水う羽を洗ふ
 宣言がうすく叙を言
 八十年を三ツ見る老母をう
 千とうさうをむるセツのつは
 西南又柱れをれつの本を言
 蘭のあううすト木うつ言

翁

翁

五ヶ所寺十歳
移任

妙子^{シツノ}家^ヤの賢^{トシ}なる女^メ也^{シテ}と云ふ
 海^{ウミ}に雲^{クモ}をたらしよ日のくれ
 そやり月^{ツキ}をく梅^{ウメ}子のきこ正月^{トウジツ}よ
 はふまも向^{ムカ}ふふ舟^{フネ}をた乃^ノ三^ミ子^コ
 寅^{トウ}の日^ヒを思^{オモ}ふを御^{ミコト}原^{ハラ}の念^{ネン}記^キて
 せのわたりをうきい南^{ミナミ}京^{キョウ}地^チ
 いづきーくー泣^{ナク}とも志^シよぬ人の係^{ケイ}
 涙^{ナミダ}もあつきたよかこ
 栞^{シラシ}衣^イのちよは澄^{スミ}よまろし
 わのうきよくー簾^{スサ}やーやろく
 怖^{オソ}くせぬ夢^{ユメ}を責^{ツク}る却^{サカ}て雨^{アメ}

○ 田 家 眺 望

吾^ガ身^ミや昔^{ムカシ}の平^{ヘイ}を可^カひわく
 冬^{フユ}の朝^{アサ}日^ヒ地^チを丸^マなりル
 櫻^{オウ}梅^{バイ}山^{サン}家^カの侍^{サマ}を木^キ地^チをあ降^フ
 ひきまをうしし地^チを丸^マなり
 言^{コト}も多^タき目^メをうしし月^{ツキ}の丸^マなり
 願^{ネガ}ひもまを草^{クサ}を印^{イン}する
 袂^{タビ}のそら旅^{リョ}の由^ユ連^{レン}歌^カいと
 柳^{ヤナギ}を丸^マなりし一^{ヒト}女^メ生^{ナマ}目^メを
 床^{トコ}とくし橋^{ハシ}の苑^{エン}の丸^マなりし音^ネ
 昔^{ムカシ}も多^タき箱^{ハコ}をを丸^マなりし丸^マの香^カ
 雑^{ザツ}進^{シン}し鳥^{トリ}帽^{カッパ}子^コ地^チ女^メ五^イ三^{サン}十^{ジュウ}

○詩友か調(三)案(下)
あ白罪下ニテ云

庭よ小舟他さうひの藤衣
ありあつき山橋よはく下見
麻うしといわ(奇)の自果あま
はを近く指(あ)菴とせを移
み舟出上ゆかおあう、あは
たひ衣留よる宛を折(拂)
着(裏)あまは小舟の山あひ
岩をえんく(か)酒をさうり
と食の菴を(さ)ま(ま)芝の(ま)を
流の(ま)ま(尾)よ(外)鮎を捨(は)け
所(新)よ進(む)むれ(れ)み(る)あ(り)
とに(ま)ま(年)地(小)角(を)地(死)せ(は)

萱(あ)ま(ま)を(ま)た(炭)団(つ)く(く)白
芥(よ)あ(ま)れ(小)房(あ)り(お)む(れ)り
お(ま)を(ま)ま(れ)こ(た)そ(ま)ま(の)東
ま(り)ま(ま)に(飯)老(の)そ(く)月(の)を
高(ま)ま(ま)ま(ま)子(風)や(れ)ま
汐(後)ま(ま)根(あ)れ(ま)片(一)底
皇(腐)つ(り)ま(ま)母(の)妻(ま)ま(入)
元(政)の(ま)ま(れ)ま(ま)修(皇)へ(一)
伏(見)木(幅)地(鏡)を(あ)ま(る)り(川)
い(ろ)あ(ま)ま(男)猫(ひ)ら(川)を(捨)ま(ま)
春(の)ま(ま)ま(地)雪(を)ま(ま)ま(ま)ま
水(下)ま(ま)ま(ま)の(聖)白(ら)や(ま)ま

山 華元白ニホフよまのいし

○追加

いよまんとと 雛ツバサふらしむる川敷
橋ハシ上ノ安やすゆるうれんや此コノ川
とくさササ下ノたにニ登のぼるちやせ
拾ひろむと事コトとなり夢ゆめ新あらたくせあ
浪なみよかかつりし月つき海うみ
ひらりよ橋はしをわたるは收と阜ふ山さん

(Faint bleed-through text from the reverse side)

ひさこ

江南ニホフ乃ハ疏ス頑ク赤ニひさこを道みちれしては死に公は是をあらむれ哉
由ゆ里り酒さけをあらむをあらむをあらむ或ある大おほ程ほどは造りく
江え湖こをつられといつる物もの之をくもして是をあらむれ哉
惠めぐ子こううて用さしと成してはつりくをあらむれ哉
あやまりくくけうちは隔へりてはつりくをあらむれ哉
ううてまたあらむのの園の郭かく公こうとうけると思ふれ哉
昔むかし知し人ひともも足たりきりしては此このの原はら思しふれ哉
昔むかし下くだんは是をいつつれのところといつる乾か伸の乃はあらむれ哉
昔むかしくそのといふと毎まい日にちはいまをとり入い入い

元禄三六月

誠智 誠人

○花見

翁

木乃まきた汁に鱈は振う那
西日地とらによろき天氣那利
旅人の風かきり去暮
たまき七おとん太刀地 翁
月ゆく假の内裏乃司ヤ
初向つ々々 礼々々やつ
翁
名さま 不降あやあや
乃止は伝坊乃海湯の夕まを
中々も勢いのまき 山 伏

翁

心

翁
秋風水私をこころにほのめ
庭ゆくや 向ふよまき
翁
巡礼死ゆゑ乃乃うをう
何れも蝶乃うつそあはれ
翁
羅 羅 羅 羅 羅
翁

翁

翁

翁

翁

鮫

うつり考乃有職を首ふいさ巻
り六ころいしー平比うつり
鮫釣乃ちいさくつんぬ川う揚
念佛やてたむむらうりこうき
こしりえー茶もるれさきの手
た加く里乃太はれとさ
旅安福き人の短つれて
花をさあらしむ日ワ揚
まりのまは飯の下まを和日
生刺あつる師のまきあ
け村也二彦さき一医者のあつり
そちをち中をまのさうとさ

かをさきを道屋とせは
やうな泣出は陽たさ免きハ
たのう免やも秋の夕をだひらき
著麦ふ白午山を胸中
ことさうり里乃つれの母也
あもをり子也を裸む
免つしじやあも意あるとま
文殊乃知意を聖持の意
あのか城又と生牛し
何れもせぬよるる
まの女取乃北の
あまより都をんぬあ

汗の香をくえて衣せり跡
去きしよ雨をくちあはせし
花さきり又る人の信さきり
喜の旅しむれをさきり

○坪下

旅物乃遠き星を月日
砂のしき此夜をくち
西風平やまを不の小貝拾はせて
たよぬる一ッ調ひくち

暮しきりひ二人とくちるを
秋の秋香の香をくちの
かよ死ん細氣はねをくち
目の中におもくちんをくち
あはれ又川原をくち
旅乃たうりやをくち
ふるまはる神事夜をくち
二里二をり山の下の川
え知れくち岩をくち
せえ再ハ雨とくち
雪よあよなをくち
き歩につくくち

月花は元徳をよめて言ふ也
若志先の後のかよき早敷
く歌まよふも都はまらぬ
まの勢を遠くはつまはち
乃丹より居酒の籠の一珠
古きむららの乃こる海
性も身相
死すも元徳の御乃
多を死か松函吳地流や
連々力も皆元徳
乃乃大雲寺繩子吹透
奥乃こるるに用叶

新剛す振若もちいさ
夕也の月は菜食喫
着籠乃軟まほき
四十我老老らうを
繁々花に物乃
碎取細目
松村乃危
田志今隅も苗乃

○雜

糸乃甲意下して時を過るん
唯牛糞よ風乃、おしく、音
百姓乃、少海紅支、いそ乃きて
少音、そち、お、か、う、の、繩
独、痛、く、奥、は、ろ、ひ、ろ、き、旅、の、月
蜻、蛚、あ、く、ま、ま、あ、り、け、り、物
秋、夜、あ、ま、あ、ま、あ、ま、あ、ま、あ、ま
凡、多、ん、か、減、乃、ま、あ、り、け、り、物
さ、あ、り、け、り、物、あ、り、け、り、物
ま、あ、り、け、り、物、あ、り、け、り、物
初、を、年、雜、乃、ま、あ、り、け、り、物

ん乃そこに悲そありけり
何處乃香た吹そとあひ、魚
二床ととに死て聞も各、床
涙入の中、空下く、月、乃
ま、あ、り、け、り、物、あ、り、け、り、物
蓋、下、蓋、を、お、の、所、在、の、各、年、末
雀、成、あ、り、け、り、物、あ、り、け、り、物
う、す、目、ま、る、目、ハ、と、ミ、ま、あ、り、け、り、物
所、心、い、ち、や、う、海、声、の、お、う、め、あ、り、け、り、物
海、く、く、ま、ま、あ、り、け、り、物、あ、り、け、り、物
権、あ、ま、あ、り、け、り、物、あ、り、け、り、物
晴、分、り、ま、あ、り、け、り、物、あ、り、け、り、物

精を呼ぶ家まのり
ひきりこむ煙一節を物名
香波の中を紅細丸 秋
去く切氣の波に丸を
車加乃序まもるる成月
空をよめる法をそは出
様掃とらひ吹雪居る丸
目をあそむる老のこそをあら
こひよあふさき定上侍
あふらんを杖掃るを掃
櫻を築き奇此上 茨
花の比を丸信上 露をそ

まらりよ丸を新よ丸

田形

晴道や苗代時方角る序
明丸を赤む形丸の形
扇山とのワヤを丸呼しまの元
かき急たうき門口杖文字
月夜ま利休丸夜を鼻金
度く草を丸を丸を丸
虫を丸つれくと鳴やむ

○番人ノ引
○利休茶人并
何し不伏

行是く木履さつめ
誓交を百とてさる別路
あふくもくはら信乃侍
次平のやるもよ自由なるも
狐の怒るもやうや
月氷の野を元元の浪河
雲霞の舞を招き返す
梅あはして大狼もたれて
江戸海を花さくもよ慈
あいの山弾雲の入り相
雲雀啼里の鹿羹くま教

火を吹くも所は禪門の裡又
布衣のやうい荒雲のたも
羅縵の袂をりり修ひぬ
齒を痛む人の姿を信して
身を重くもむすもよ
後世の言もも寄物を撫をき
口上男あいにこそよの竹を
身あやうもよ列をある草襦
秋の初る肥後を 隈
幾り初も言もよ身を信
す布子ひと所をさやり
深山も元先くと呼られ

呼ありルとも猫ハ及び
子細こま所ところ人ひと所ところの雨あり
や月乃つき楓かえ木きの芽こぼ萌も之
教しよ危あやし主しよ路ぢよ橋はしつるさあ
少すこゆゆるる傍はたにに也やももるるははふ

○猿蓑之方ハ別冊ニ有リ

○續猿蓑

ハ九弓くわええとと雨あめ降ふるる柳やなぎ々々非
其そのののううすす乃すなはちち島しま不ふるる也や
印いん多たののとと馬うま子こととのの三さん死し相あ感かんで
内うちをを坐まささららくく吹ふけけののぬぬるる也や
ききののふふくく口くち紙し々々るる月つきのの色いろ
持も脊せ々々れれくく肌はだををくくすす也や
法はふ授じゆももこことと一いきき風かぜにに吹ふれれたり
孫まご々々ゆゆるる禮れい又また乃すなはちち信しん録ろく
眼まなこ存ぞん仁にあありりててるる一いかからら猿さる刀やいば
燭しやくをを走まるる走まるる走まるる也や録ろくのの後あと

約本の小寺一丁に在りて
十里をくぐり地金所へ出ると
経の草は小路に在りて中を
あきまきりありと門の書つ
ひんくへ後ハ沙汰を尋ね
やりと少也いふれ道つれ
を明よなくして花の鳥をあひく
んくゆにをらふ祖のそく
まきをまじりて丸うねをま
伊勢の下向は多川とて道
七橋は少寺乃仲るをい
くくくくくくくくくくく

禪寺と一日あそび乃上
柳の角乃ををぬき
漢牛一カ牛に傍をを
なれぬ瓶はいらくくく
月夜に傍ををぬき
難乃菜乃各々よさゆ
可んくくくくくく
伴信をくくくく
刺やりに七刀夜の冬の風
まぬくくくくくく
川まきくくくくく
をらりと火入るくく

あつちの志と申す
二清敷のそとのうさむや
汁のまよふる茄子乃出成す
あつちむまをア川川とす
アアアアアの移るを重し
波のおま乃あとい淋
早下しし屋よよの種
取入し秋よな
私まこりし玉置の
はるる家の母のあとい
るをくは母乃

春の志と申す
少く氣馬しす花苗乃
花のうけ常を三教よ
あ上田乃土のかりく

心と申す
冬と申す
大根のそとめ
上りし
所印
あつち

智恵院の参り此時極しく
ちく下乃後を扱ワヤヤ
廻乃鱈より此のくありし
目利く家きよん者し
伏名を豫沙の正花柳法とて
まゝセリよんをまめ日の二粒
草の毛よりくちとのめ流ちきり
伊勢氣つよ綿とりのみ
くき後を賄とつれは流ちきり
五州よりよんをりし
宗舟乃花の中より流ちきり
柳の傍へ門をきりし

百姓より参りて世乃とて字
こち先を扱りあり片葉
青乃乃流ちきりし
此のありしをりし
砂を這ふ蘇の中終線は
別を人らしひせは
火煙の火しけく後をまめ
一石母より一石のり
仰し加減のちよん
其の乃まを子術く

と走りくつくつと人そくはきとやして野火
 思ひ山を切るとたあつたかたうあせると人さへうに人
 を魚にさへ包むとにあらねばあおちうふ舟の左を
 改と先は^{いづか}岸乃ちふとたはういふの魚をさへし
 むるたとひまを侍りし阿叟は海川乃ち舟をさへ回す
 乃美秋とさすこととハ^{いづか}舟はさへ地あひの
 海くく伊実乃山仲は父母の古墳ととやい路の遠
 少は^{いづか}舟はさへ舟を舟にさへたよふ
 かかくや^{いづか}舟はさへ舟を舟にさへたよふ
 の^{いづか}舟はさへ舟を舟にさへたよふ
 一^{いづか}舟はさへ舟を舟にさへたよふ
 として信あり信あり信あり信あり信あり信あり

その文乃何ん比あのを砂川の岸へお松をひさせられ
 うと一^{いづか}舟はさへ舟を舟にさへたよふ
 うそや一^{いづか}舟はさへ舟を舟にさへたよふ
 こととにあらねと^{いづか}舟はさへ舟を舟にさへたよふ
 ちのつうとよとてふと人乃^{いづか}舟はさへ舟を舟にさへたよふ
 乃^{いづか}舟はさへ舟を舟にさへたよふ
 阿叟も古まとの方へと^{いづか}舟はさへ舟を舟にさへたよふ
 伊勢の方乃^{いづか}舟はさへ舟を舟にさへたよふ
 も^{いづか}舟はさへ舟を舟にさへたよふ
 まつられ^{いづか}舟はさへ舟を舟にさへたよふ
 今春舟を夏のとく^{いづか}舟はさへ舟を舟にさへたよふ
 真実何々^{いづか}舟はさへ舟を舟にさへたよふ

中のおとを四割^{ハツ}盃^{ハク}乃^ハ好^クま^りあ^るを^のま^んん^ん
を^あれ^あひ^あ

互の取や山崩^ハや^ハ月^ハ冷^ハ曲^ハ
そ^ろろ^ろそ^ろそ^ろと^と蓮^ハの^極先^ハ
望^ミま^りつ^つそ^の初^ハを^入く
古^キ草^カ花^ハと^反故^ハ取^ハむ
月^ハ夜^ハの^音も^ちち^うう^の音^ハ乃^ハは
走^マり^あく^く浅^ハを^分る^答の^よ
徳^ハと^招夢^ハの^命を^追興^ハ
山^ハ石^ハに^名を^書く^出凡^ハ
段^ハ捲^ハる^面偏^ハを^まじ^火打^漆

蒼^ハく^又成^ハ走^ハく^る思^ハり^障
何^ハの^うり^の界^ハも^もも^も持^ハの^海
持^ハ佛^ハの^うり^の夕^ハ日^ハさ^ハハ^ハ
平^ハ野^ハよ^草を^蒔之^ハた^を取^ハ
秋^ハ凡^ハと^し門^ハ乃^ハ居^ハ凡^ハと^名
馬^ハ引^ハく^海ひ^初る^月の^元
尾^ハ北^ハく^つき^ハと^の名^ハを^取
鏡^ハの^池と^ハ乃^ハ花^ハと^あら^んく
白^ハ月^ハの^一襟^ハも^とと^こさ^んん
妻^ハ凡^ハと^身の^はや^りいた^ん
藤^ハの^一村^ハ入^ハぬ^斤の^うり^の道^ハ
喉^ハを^ぬぬ^ぬ幾^ハも^留る^口ま^いく

何その時を山伏しなり
花屋とを傳ふなり
蕨こはたる卯月花く未
お宿と伝先しなり矢本所
除乃日相し一雲乃一氣を
春てろもをせぬ源の引を
差かへの分と身あつて
刻付し一又名もなる春の
をろくありく益乃上臈流
虫籠つる四糸乃角乃河系
る流をあらう表一十固
今乃子と流を身取ぬ流橋の上

大に左流はとんしは夢ゆ
盛而も花も飛石しを
腰かけつこと一花棚乃下

○春之部 花様

温石乃あらしり夜もや元川様
度時多し又ら可も存る元川様
秋は似ぬ不の句元出し一初ま下
ちら道や不乃股さる花の山
菊いれし人をかいらや花の友
花数く竹見る別れのやすさ

○富貴なる酒をよあそびて文君
 凡事も醉乃ちまきれは思ひに
 酒歌をうたふ乃ちきこも窓の
 賭しして博せられうささ下
 人の氣もかくく窺へたり
 くらひ日や地中乃ち花の
 七りよと花見におもひ女中
 見し新おのち玉やとりま
 咲花をむつうルある先本
 家存るやあやうと垂尻を
 二の儀やさなふ吹さむ
 養虫地出ころよひくく極

○田家

藹藹コシミ乃ち名取をたしや海極
 咲かす花や飯米六十石
 山門よ花見のり木のみより
 花の根をきせく似合て人を
 大んやんに垂尻をたれ花の
 ぬり並尺原方きありや
 一日き花見のあてや且
 八重極菜より移るま
 若菜
 薄椽や菜こころし土をさ

糸乃啼やむ泣乃若菜ら船
夕波乃私こころなるなり
一か母乃牡丹きまき若菜

○梅 附柳

妻もやしままとのふると梅
きざしまや大正柳も梅のむ
守梅乃あをい業やうむ老賣
里坊ま碓まくやまたのい危
投入や梅のおまきき落たるたう
病傍の座をれ梅のさかるたう
あたりき翠の扉まるまじ梅花
尾まる梅のいまく下結のた

走下梅やたらふ家もあり
寝下や梅のまりひをもる人
○天神のやらまは語て
身は垢けとりるや梅乃親まハ
それく乃勝乃なるや梅柳
時くそままらうちり川やあ手
ちら道を敷へちらうや古柳
まの柳の走れくまりる此曲
輪をうけくる糸通る柳か

○魚 附魚

さらる七刀かいは美塵る南
あらひまるや柳を堤越の凡呂
あらり

此の如きも世と休む方ありしを
ふくひくや柳乃うろ敷のま
渉去世もあしけと雛乃ろくか
妻面や善くはくまゝ雛子は夢
約をも此目のまわ七りけ言根り
こ毎ちのまゝ似合へる白銀を
燕や田をたれり之は馬のあま
巢の中や身ををぬくおや燕
雀子や好しあひひ雛の程
颯うちよあまし者此子飼り
り野やを風まつれて此様
ま○此野は河乃渉

鮎乃子乃んたまはし渉のま
かけらうとちうつく小鮎うま
ま不魚乃一かさすりや夕ま
白魚乃まろきまを法まぬし
○海川はありちて
ま魚をまひまらむにまらう

打
なうりても海と川世話やまは
若竹や松まつけら鮎乃
ま乃也やいつれのまにうあれ
川渡や流るやまむるあ角
春の雨まらや土まの七三不

つひや 梅の花は 春のあけをきく
よみたるは 後そよよのとも思ふあきも
境よりこころいふあけのこころ
瑞まゝに土堤乃ち目や落の塔
ぬこまの形は花をいふ大根
早蕨やまゝより山乃ち枝のうら
こころのなを乃ちおひひし肥るこころ
日乃ちぬく猫乃ち爪をいふ擲活芽式
蒲公英やまゝよりそくは花をいふ
○猫虫 附明虫
赤い糸や肉をいふ枝啼猫乃ち虫
よみたるは 玉乃ちてや猫乃ち盗喰

おひひしこころ此里毎けら狸猫の

○白日土つた也

さきよりそよよを動く胡蝶が
衣互忌のうらまゝやまに蝶乃ち相
舞か舞かおつる様よりこころ
ゆきより舞の出身より小蝶が
まゝに花をいふ花をいふまゝに
○春鹿
振和よりいふや鹿花乃ち舞のうら

○雲耕

雲耕乃ちいふまゝに存さくも麻
苗札や笠縫をまゝに存す

下川乃田城かへりあり誰波人

○桃 附椿

白桃や三川くもるはあの花

金柑多きよく盛なり桃乃花

伏見くもる茶粒乃上の花の死

梅さくらの中をまきまき花の花

花さそふ桃や音意奴堀躍り

○紅糸乃本字由り社文乃懐旧乃語るニ
木のく経文頰力多勢子下社臨光浦孫を

小眼縮く光をや名玉つちを

後を枯くまらば花咲梅うか

をあげくえを梅のふその穴

ちり玉梅あやうらむまは種くえ所

○款多 附踏躑躅花

山吹や梅よ干くま葉一 一主

○田家のくま射り

山吹も教多ふ茶也 鯉そまを

堀おこははしりの株如鯉のよる

菖蒲や梅夢よましくまの花

○春月

山乃陽をちうり点くま乃月

○春雨 附春雪

春よりきそあの花をくま乃雨
春より雨子合りま乃雨

去而也 唐在也 乃 乃 乃

そまうくし 本に旅店を有るは

去而也 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃

○沙干

乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃

○雜書

出 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃

○三月廿九

乃 乃 乃 乃 乃

○筆目

乃 乃 乃 乃 乃

テイシ
蓮
クサノキキ
ワラノミヤ

○クキミチ
ウツハリノ如草ノ両方ヨリ蔽フニク
タテト

蓮道ハ年のクニ此三妻也
学や新黄のクニ乃里居を
蓬萊乃クニのクニ螺乃貝
母乃乃攷先法止ヤ美を始
待よいつ侍衣裳を顛倒正と心
本をを文乃文又言裁し侍を元
元口ヤ扱り衣乃を衣
人を衣妻如滝乃を此柳
明を扱此石地をのれしあを若
襟乃世阿弥をありやをかはし
鉾をあやたを右に山を松の陰
茶を侍をんを乃をあを林

尤り妻をよくを任をこを五を何を法
○を年を海をををけを
元口ヤ扱り衣乃を衣の危
子を共をあをりを世阿弥をあを花の妻
背をきをあを女を場をををえをせをやを花の妻
齒を歯を乃を花をにをんをとを包を庭を此を鯛のをり
鮭乃を美を夫を地ををを年をををちをとをくを和を日を分
尤り妻を也を年ををを若を接を乃を白を比を丘を危
枕を把を乃を系を乃を控を悠を多をりを初をををんを
世乃を業を也を故をををあをれをもを若を夷を
流をいをろをやを大をがをけを乃を初を日を致
元日をやを重をとをもをろを致を猫を乃を女を器

我中とくを久くはたはたをえり
梅栗や解の向をくはるる
虫より此を地日は似るる花の事

夏之部

郭公

曉乃雲をさそふ和るる
法どき夢啼の湖水此を
志と懐や何を本すけり時を
蜀魄啼めぬ白朝魚山
鳴渡乃名もやせりあふま
燕乃存をむむえやるとき

遊よりも勢田よあけり子親

はうら石山の麓して順礼此吟く通

郭公かたの舞や中や

木州草花

橙や日の之をれさるるわく
里乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

園中

は中乃古木はいつれ橙乃乃乃
季印乃老木を存の着るる
娘百合や上よりさか花の系
題山家
出る中やうき神を

○ 螢

船を火地 潮をてりてふ
二日月に糸乃虫を捕るる

○ 納涼

涼しきや竹控りりけ敷はひ
草花や一廣を中しひ夕涼

○ 深川の菖蒲

左也侍を也や風あきくち地解涼
涼しきや竹控りりけ敷はひ
石舟しや豊川明く夕すく
涼しきを牛乃尾振く川の牛

○ 漫真 三首

腰を打く申し涼しき階子の那

涼しきや椽より足成ぬと丹
生研を福ちてく免く涼く

○ 七草の和と草屋

涼風と出まじし涼のころれ

涼しきや竹控りりけ敷はひ

涼しきや竹控りりけ敷はひ

黙被しこゆる涼や石のりし

秋人乃惟子まきく夕はく

涼しきや竹控りりけ敷はひ

○ 筆之反

かつえとや照りかきまじり庭の福
 ちや盛るつらせのふじり地暑か
 ○ 蕨園者乃心さ欠すまのしよき
 実まとい清く存冷乃是らう
 元普力内のあるまや持はらひ
 輝さうの日笠あつー庭とよら
 淡中夜もまほしめ日若らう
 葉のそや暑を母よえらう
 ちうさ日や庭をさんは地をま
 後あけく是さ心やせんまらう
 粘りあふ飽てはのちつさう
 三まぬそそらうとらやの暑か

○ 木のこ

荀ふめを寝る冠乃山崩つる判
 ちやや畑のらうる庫裏の窓

○ 五白雨 海夕之

ちうとやまやまらもたふは徹か中
 さらうれや蚕かゆ素の畑
 五白雨や踵ととれぬ海つら
 夕まぬさー合ルー日傘
 白雨や蓮のをちうと池の芦
 夕まぬやちうとかけの竹の原

中まぬと傘さうるまやまら
 中まぬと傘さうるまやまら
 ○ 蜂

白雨や中座しや、
蜻蛉の影
きりとりと、
虫乃蜻蛉座し、
蛸や、
蛸啼や、
ぬの、
窓の、
時

○うりなを

笑乃目カキ、
蛸ウシト、
蛸

○雑々

虫乃蜻蛉座し、
蛸や、
蛸啼や、
ぬの、
窓の、
時
志々、
焼や、
妻か、
下く、
登く、
柳、
鏡

○川、
梅、
は、
い、
て、
り、

異、
果、
に、
あ、
る、
や、
国、
の、
果、
穂

夕、
園、
を、
あ、
ら、
わ、
く、
も、
き、
や、
酒、
を、
飲

○あ、
ら、
わ、
く、
も、
き、
や、
酒、
を、
飲

魚、
は、
あ、
ら、
わ、
く、
も、
き、
や、
酒、
を、
飲

梅、
は、
あ、
ら、
わ、
く、
も、
き、
や、
酒、
を、
飲

蛸、
は、
あ、
ら、
わ、
く、
も、
き、
や、
酒、
を、
飲

蛸、
は、
あ、
ら、
わ、
く、
も、
き、
や、
酒、
を、
飲

○晋、
乃、
淵、
明、
を、
う、
と、
や、
む

窓、
は、
あ、
ら、
わ、
く、
も、
き、
や、
酒、
を、
飲

粘、
こ、
い、
な、
帷、
子、
か、
あ、
ら、
わ、
く、
も、
き、
や、
酒、
を、
飲

夕、
園、
を、
あ、
ら、
わ、
く、
も、
き、
や、
酒、
を、
飲

老、
く、
あ、
ら、
わ、
く、
も、
き、
や、
酒、
を、
飲

麻一布子
惟子乃祿ひひきやけし祿ある

○秋之部

○名月

名月ト禁の旁也田此ノ也
名月の花と云ふは棉田

今年ハ伊賀此山牛と云々名月乃此也
を引一牛と何れも是いつれも非也
一にば言ひつへんは月をまう言根のま
をれと云ふは云々初時雨と云々
園位と云ふは毎々云々禁ハ考核り

あぢあぢと平田渺々也是云々を老杜
吟を云々のと云ふと云ふは云々
是此汝の棉を云々ハ毒氣を毒一とんを云
やの云々は云々此二此を新此一節の候あ
月乃云々は云々云々云々花と云々
斗にとあぢや云々ハ花は淫馬あり月
に陰ありて是と詩云此ると云々云々
前ハ寂寞を云々と云々後ハ凡無を云々
を云々君云々何そ是漸を云々云々
あぢ云々は云々乃人云々云々

支考評

名存乃海より冷る田甚か

橘指山信

元初の客よまをう川月を
○淀川乃乃遠りよ日をくすし

年月乃乃たかよすけく月を
河津の月よ二席や定元所

○あま三女とあまのあつ三女將監
和して信人信りしをさひあ

媛指を同く地をりやりの月

西海あまきく月入あまや堀りや

暮うく月すく月と公指が

月新や海の香夢七二廊下

○深川地末五幸松とあまは松をさして

川上とこ地川芝名や月乃な

十六夜きつらに園の神を
○七夕
心よみり園のあまをそこのむ

よりやあ由地と花あ由の川

星今夜見まよと夜れ新を

松原のまをまらとくやる地れ

あまをさすけいあまの神まをま

新元や薰姫乃園をさ

○三秋

粟あまや二夜よ行よるを新秋

秋五川や中よつとくまの山守

○穂子

朝花夜花遠道に枯花
向うとてをりぬ花影もつら
女と花ねはぬ馬車も乃花
女と花 枯花の枝もあはれ
一歩の花影もあはれ
る園も比あはれや

○ 芭蕉 芭蕉

百合の道 芙蓉と霞を合
けり船乃ちをりぬ花
枯のるもあはれや
花影もあはれ
花影のちもあはれ

わくやあはれにさるるを
苦地を声とあはれ
山人乃馬車を
凡毎る長

○ 柳 柳

柳うすのさるるを
あはれ乃遠方
あはれ乃柳影
柳影にさるる

○ 虫 附鳥

きりり此侍に
電もや影もあはれ

火北清く明はやくふ虫のさ
秋の鳥や夢と新とさきとさ
と此虫や形は似合し月比の乳
鱗鱗や何れ歩あるひ千の先
鱗鱗や腹をひやせう石比上
蓮の実と種さくらん野のを
わけうらまはひく死る秋のせ
乃くくくくくくくくくくくく
鬚鬚や走り矢さる白川原
粟乃種をえあるは時や啼語
老の各地方とも志とく四十雀

○秋風

秋風や二番たをこの抄させ借
雀子の松をまむや秋のう夢
何よりとわらうり秋乃れ
松のさやあまも他は秋の鳥
をのつらと草乃まをてあが
ぬんをまやあまもあをらあ
あ丸くをまあありやうらま

○稲妻

ひよりあくままあまこく稲の衣
稲妻やまをうまうらま梅の上
あまあや稲つみあまをのち
稲妻や雨乃うらま太位のお

木實 附前

因粟乃高くとりて石佛
炭焼し洗掃たりを俣うね
秋より日知るに洗掃の色
は好くも筆をもちて板こが
え川草や塩しを洗はさる
伊豆乃山牛も所更なり
糸巻代とあやひく
朽草や破りちる山乃形

より草也其木此系也

つらつら

翁

相

後屋乃塙しをぬりり村系

麻

鹿正よりたぬ明乃麻や凡の言
麻かつまに麻おらうは鳴子や

農業

起しきし人ハ遊りく蕎麦を
木乃下に裡むむ不穂魚う赤
まゆしけし乃七やうすり畦の稲

山家をとん

蕎麦ハハハハ花くを存る山家
早稲刈くは紅う布や小百性

山雀乃此こやしに啼我の編
五ノりともきに河原藤身も小葉組
一まね乃まや芽乃花んと刈
肌まき始よあうー葉まのくま
百たりーく心くーハ西を想か下し

○大師の系よあそひくー桔政と

よ孫よまひくー

その法くや 西瓜上戸乃花乃粒

○菜

蒜竹二百十日七恙心か

夏而ー子や花と白菜乃玉牡丹

煮木綿乃香にまー菜乃花

○野登屋

すうらまきやか山越の菜の香

傍るけー一彦の櫻やルよの菜

○五季秋

廣法や昔有るかー秋の香

り秋成鼓ら乃糸乃恨くね

り花やも成ひろ乃栗いら

○雜秋

五六十海老佐おやー一ツ

栗かー此小家他とまねわり牛

あし存る此壁ー近住くおまが

殊る敗や心死時也。秋の菊

才少はいに多乃に初手と細や
 あり松や稲こく家乃契等
 持乃を少た獲てそ~~て~~人乃著
 ○不乃主馬を花と穀等とての留設
 をう所へく~~て~~執止とて生を画と年
 基の望よりけりまをん生を乃
 兵ふれを~~と~~は~~は~~此あそひ~~て~~殊
 死ん~~や~~か此穀類を花~~と~~て
 終~~て~~對~~て~~く~~て~~を~~つ~~く~~て~~さ~~る~~て~~は~~此
 生をを~~ま~~め~~さ~~る~~て~~その~~し~~
 稲つは情やう~~不~~乃~~也~~ころ~~う~~
 厚乃~~乃~~穂

和

○ 冬 部

○ 晴 雨 所 表

二地乃乃恒乃~~恒~~日~~や~~花~~り~~時~~雨~~
 走~~る~~此~~年~~き~~み~~私~~れ~~の~~只~~を~~る~~ん
 一晴~~雨~~す~~る~~之~~り~~を~~て~~口~~に~~私~~る~~邪
 初~~て~~之~~れ~~少~~濁~~乃~~芋~~此~~者~~加~~減~~
 平~~押~~て~~立~~反~~田~~之~~も~~時~~雨~~之~~邪~~
 宗~~賣~~也~~て~~之~~れ~~乃~~是~~廻~~る~~
 院~~賣~~也~~と~~上~~甘~~乃~~乃~~初~~時~~雨
 定~~然~~乃~~也~~之~~り~~引~~込~~時~~雨~~下
 多~~る~~取~~や~~浸~~る~~ころ~~う~~一~~く~~之~~れ~~

石より雲より香炉とぬらん時雨や
柿包む日私を布やむむ下所
高きより上をぬらん里ハ森時分
○浮雲をそるる乃云よとききり地

日就よりこそあぢらありん終

沖西乃鈴日くろぬ時舟うね
を川流や大比土かく凡乃江
流より川を流や一葉ふく地今船の流

○元禄辛酉二月卯九日素堂

○茶園之遊

○茶園乃宴を神女は舟の川に從け
傳ふ真公を地比き花以ふくぬんこ七

やん茶をひく時別平前とい

つるを茶をさるるよりを屋主

のふれりてを手にてもあぢき

秋茶をを味くくくをす

ゆふれりてを手にてもあぢき

茶地香や庭より切らるる底

袖乃色や花あうりて茶地を

茶乃乃氣保ぬるを後や茶の中

ハや乃雨や河川も茶の香

何魚乃かこに玉へ茶の地枝

○茶園客と園中をにりりり
柴茶乃乃後士無終乃終を

七ノノ系と稱乃云々
 心さるゝ造化をうそふなれし今
 石花不らむ身以てを純つるを
 とをんといつて山家乃言所て
 琴平乃言けりもふんやと片
 人は竹洞老人乃言終を道てん
 一々一) 冠を身より一冠を袖より
 してある心教事なきに徳あるこそ
 凡そ志ぶおはせて自身不くらぬ
 うるしめぬ習や他乃言乃言乃言
 ○草新木
 水仙や練珠乃れ一日乃透弓

有や清く咳や葉乃言花水仙花
 乃仙乃流乃言乃言乃言乃言
 ○花蟲趨有地こも言さう
 山家乃言乃言乃言乃言
 一乃新とこらさる葉乃言氷乃言柳
 山乃葉花乃言元より固乃言乃言
 乃言乃言乃言乃言乃言乃言乃言
 山乃葉花乃言乃言乃言乃言乃言
 ○木乃言乃言乃言乃言
 乃言乃言乃言乃言乃言乃言乃言
 乃言乃言乃言乃言乃言乃言乃言
 乃言乃言乃言乃言乃言乃言乃言
 乃言乃言乃言乃言乃言乃言乃言

藤より足さかりより木乃三少ナ

○平柳坊家比の彦をいづれ

をいづより先なるをいづれ

枯たそしちりてをいづれ

牛乃乃たを枯た乃たをいづれ

冬枯に云々まていづれ

草枯より川をいづれ

此の枯のそんをいづれ

木外よりをいづれ

風や此の半をいづれ

木枯や川白乃時此決まぬ

二かしや其まにちん牛の角

○夷溝

るいす溝研賣王橋忌でん

直比壽謀勢を鴨子成るん

○鳥海いを

○乃と乃海をこく

塵浪より海の日とあ

追ふけく意よりあ

少ねもをいづれ

海や意乃登より

川鴨をいづれ

抄抄より海入へき生海流か

口抄
抄
抄

〇〇
トフ
ツ
魚

くゞくと海月と文子なるまこと
及之速戸子持ひしあはるる来
一信よ初白魚や冬花の安
かく好りや版をたたく降敷
杜夫魚を河豚の大さうく水上に浮み
哉乃川よ此こあるうをあり

〇冬花月

窓ののり門くありくを此月
あし楯乃かけあはれや冬月の
何ふも春乃さすさす紙海月
乃宿門を坐丸を此乃月取

〇埋火

埋火や磐乃月客地取而
佳しき冬夜息を息し
自由さや月を此乃火徳

〇冬

初雪の門く宿あり夕つらき
鈴こさや月言うる子乃月
雪あふん心乃らんく
鮫鮫家とさすてさくれ
雪の夜をさすあはれ
ぬる川子を草鞋をたれや
片髪や雪降るくすす

〇スサハハツタ

とをい乃習見也。日枝の初後
登利を海島る雪ら比らの所
伊賀大和さなる山や雪の夜

○和東

折神赤に齒元喰志めぬをや

○和くま

今更時やうあふん下平地所
此たつき下懸着を近あり
坂入の門をこりり所たつき
狼牙這了迄はら所くそ
○煤採 煤採つた
煤を記也尾追込黄楊の中

煤をきやあふんかあさるを
火元不疎乃かや煤んを好
煤をまよつたれく出所所
煤採やおあ一夜踏くく
餅つ手や火攻かしく男孫や
餅つ手やあさるをさるのや
中ちつりやとを煤以まらわ山伏
○和東 煤採つた
二和返る尾元所走の市はま
門砂やまきく之を煤の流はた
賣ふやと川とつたを煤のさ
煤をわよのりりまらたや幸のさ

大年や親子（依）の地指（三）の
禱きめ舞年のをあり年の
年地帯海を呼ぶお成の
井二石凡少直七市地師をが
川指ふ一は不浪やと地まる
桶の指地ひとありあふし年の言
天龍も地さじふさかして年地帯
濱萩ふるまを指さくくと地帯
○比の八圖司言をわ人言より系へ
のちるとして伊勢をすすうて作り
はれおのをいれをさうとませしひ
あしてなまをき人といありし

望人の運のなぬもあう幸地帯
幸ふく後と元正地帯志地帯志
漸も海新也東の年地帯
良を山や箱りて近す敷の中
地帯元人地指子林わうん味地帯
哉層ハ東地子らわのきぬ死り
一志まし啼く静り陳地帯
○新
小屏風子系を扱うるをさや
柱行と何風子山一尺の指
井乃のあさうらあるをい
毛勢や山伏村乃長はしこ

吾友トトを地々あけしや土塊
火種すう麻より燭ハ板干也
山陰下接う尻杭くをり向
御板下く(空)地根地重さ下
第州や冬多く新少玉洲
○新教之(内)追胎(長)務

○温解

温温係係あらま長日日組組はたに
初初た(念)念念やや皺皺念念念念殊殊教教のの言
山山寺寺やや猫猫守守りり存存るる存存るる係
多多福福也也中中よりより成成ままるる温温係係
○灌佛

灌仙やほりかぶる井原
教教免免やや併併ううかからら二二三三日
灌佛也也新新也也提提婆婆をを徒徒才才之

○意系下

冷也也之之ふふああくく一一魂魂あり
麻麻及及其其地地かかららくくくく魂魂ままり
山山伏伏也也坊坊二二玉玉中中玉玉中中つつり
○甲甲成成のの交交大大津津守守傳傳しし也也此此地地
ももととありあり清清息息やや九九少少九九元元旧旧里里
乃乃りりくく益益念念とといいくく乃乃むむととく

家家ののままをを枝枝下下志志下下好好者者也也是是意意
○悼少年二句

うかすや麻木地著るに叶地を
そ此親を去るぬそ此子の林の
○う海々下此死口寺に語く

肩此座に稲妻のすはそ地時
とく石や稲妻やとる桶地也

○水乳満
抽を杯におはれりく水乳満

臘八

臘ハをささくくくんれを細を汁
何此あ乳かのあ乳生ハ大師講

雜題

活節のま如堂にゆく善寺奇筆

開化地時

涼しくそ地山々つれを佛が

五とと母もきと二事さールけり地を

り細やちり去るまを佛を世

らのもよ川越向ふや富士宿て

手まをしに朝の雪津一交念佛

念をよ雀常ふり夕暮々の

○旅く部

送別

元福七年地云たせ成公好の別免返りて

麦ぬくに餅虎の云せ地別く部

別くや柿冷以而くたの上

○許六う木号よ取むく時
旅人の志を留るも似よ推の花

○留別

流世惟然う宅ヨリるる時

旅ともおまの草を正にかゝるん
旅の子の志を急送了別う那

○甲斐のう此母よ旅る時

宇都の山廻にうりて

○辛よりし午月のりりり
縮つ母やうき世味めらるる旅麻山
あ(七)きくつあう川原や旅の者
○出れぬ子おも切く時
旅る時

うれうの岩地なりんじ
十園子も小匠ぬるるお他の
大名此森るも神も
○くは世路

くうさうと弟もきう川へ益の旅

匠を今人上て家置る木号何や
明りのき多ちをれうし
旅安
旅をばけく砂河あつて原の馬

○四國の心と山崎の道

文吾乃庵ひし舟を種
我旅の心と九旅の心
○幸座の心とあふいとふり



てやうと承くしやうにその振はる事一寺
ありそとるとうきりらに二枚別帳

乃新の下つてやう好し

様も存し情や林に少く 彌

を川血や道よはつてふ花ゆと

元禄二年の冬に粟津の寺を焼く

氏によ切切くとし法田此驛

梅亭の景に至りて

をを成

名かりとら名林を成じある

外にちよと別帳にあり

阿部兵十良主

二月十日

Handwritten notes on the left side of the page, including the date '二月十日'.

